「佳人」から「女志士」へ

―宮崎夢柳の『鬼啾々』『芒の一と叢』を中心に―

湯　薇　薇

明治十三年から二十二年の間に、宮崎夢柳が数多くの政治小説と漢詩を新聞や雑誌などに発表しました。自由民権運動家としての夢柳の具体的な政治活動はほとんど記録に残っていないため、文学創作が彼の主たる活動手段であろうと思われます。

夢柳の文学的営為が彼の活動場所の転換にしたがって、凡そ三期に分けられます。同時代の自由民権運動の作家に比べて、作品の上で女性を多く取り上げたのは彼の特色の一つだといえるでしょう。本発表では、その中から代表的なものと思われる女性像を取り上げて、それを手がかりに夢柳が自由民権及び女権に対しての理解、そして、如何にそれらの近代思想を作中人物の言語や行動などを通して表現したのかについて考察したいと思います。

本発表では、主に資料二にまとめた四つの女性像について分析を試みたいと思います。その四人は「毒婦」であり、「孝妓」であり、「虚無党員」であり、「貴嬢子」であり、身分はそれぞれ違いますが、多情性はその一つの共通点だといえます。また、美貌の持ち主でありながら、男勝りの精神力と行動力を持つことはもう一つの共通点だと思います。毒婦は伝統道徳に対し、女志士は社会秩序に対して、両者とも大きな破壊力を持っています。その容姿と行動力のギャップは当時の人々を引き付ける理由の一つと考えてもいいでしょう。

「春色雙木の花」は現在知られる夢柳最初の作品であり、他の高知時代の作品と同じ、厳密的に言えば、まだ政治小説とはいえません。この作品に「彼の東京の新聞でその名も高橋毒婦なるお伝」などの字句がみられることから、

「毒婦」物を視野に入れて創作したものと思われます。明治十二年一月三十一日、高橋お伝が死刑に処せられた後、『東京絵入新聞』などの新聞がこの事件を大々的に取り上げ、お伝の一代記を連載していました。その最終回の一節にお伝が処刑された後、その死体が解剖され、「脳漿並に脂膏共殊の外多量にて、多情の婦人なるべしとは知られたり」というように記しています。お留はお伝のように殺人の罪を犯したわけではないが、役者に惚れ、その上何度も夫を変える多情の婦人であるゆえに、「毒婦」として扱われました。「毒婦」の「毒」とはその犯罪の凶悪程度を表すものだけではなく、「欲情」とも関連することが窺われます。

「高峰(たかね)の荒鷲(あらわし)」は夢柳の初めての創作物であり、主人公は悟山という幕末の志士ですが、歌扇に纏わる話は全篇の半分ぐらいを占めています。女性が親、夫の敵を討つという内容の物語は中国稗史小説にも見られますが、彼女たちが復讐を果たした後、あるいは出家、あるいは自殺の結末も「高峰(たかね)の荒鷲(あらわし)」と大差ないが、その自害の理由は完全に異なります。儒教道徳の枠組の中で、「孝」とともに重視された徳目は「守節」と「貞烈」であり、それが中国稗史の中で「孝女」等が復讐を果たした後自害する所以です。それに対して、志士の信義を成就するために自らの命を犠牲した歌扇は単なる「孝女烈婦」ではなく、「志士」の相手役を勤める「佳人」でもあります。言うまでもなく、志士と佳人の設定は最もよく見られる政治小説のテーマであり、当時広く読まれていた『経国美談』、『佳人之奇遇』、『雪中梅』をはじめ、ほとんどの政治小説は志士と佳人の物語であり、夢柳の政治小説もその例外ではありません。その設定の理由は当時の文学観と大いに関わると思われます。小説のことを「情史」ということや、『経国美談』後編第一回、ペロピダスとレヲナの会話の場面について、依田学海が「有這箇光景、乃能做小説」と尾評をつけていることなどを通して、当時、男女の恋の場面は小説にとって、如何に大切であることが窺われます。

資料三のAに描かれているのは歌扇が始めて悟山の姿を見かけて、心を引か

る場面です。が、資料三Bをご覧になれば、お分かりになると思いますが、多情な毒婦お留とは違い、歌扇は親に対する「孝」によって自らの恋心を見事に抑制することができました。後に、彼女を殺すつもりはもともとなく、『水滸伝』の「小三嬢」のように、「大義の仲間」に加わってほしいと悟山が自分の計画を打ち明けるところから、孝女として登場する歌扇は女志士になる資格をすでに持っていることが分かります。悟山の口を通して語られる理由は、一つは「孝」で、もう一つは自ら敵を打つ胆力と腕力です。直接語られていないが、「恋」の抑制もその条件の一つであると思います。

次は『鬼啾々』のソフィアを見てみましょう。夢柳の政治小説創作の頂点とされる『鬼啾々』が当時大きな反響を呼びました。主人公の虚無党員ソフィアは当時の政治小説によく見られる佳人像とは異なり、自ら暗殺などを計画し実行する斬新な「女志士」として異彩を放った人物です。

資料四に引用した緒言によると、『鬼啾々』はロシアの革命家ステプニャークが書いた『地下ロシア』(『Underground Russia』)の中から「両三人の事跡を抜粋敷衍し」たことが明らかでしたが、資料五Aに描かれているソフィアと同志のブラントネルとの恋に陥る話は夢柳の創作であることについて、すでに先学諸氏によって指摘されています。『鬼啾々』における『地下ロシア』の受容と変容、夢柳加筆の合理性と必然性について谷川恵一氏の論文「宮崎夢柳と『鬼啾々』」にすでに詳しく論じられていますので、ここでは、先ほど見ていただいた「高峰(たかね)の荒鷲(あらわし)」に描かれた男女の恋と比較しながら見てみたいと思います。歌扇の「孝」によって「恋」を完全に抑制するのに対して、ソフィアが一人に対する愛憐の情を千万人への愛憐の情に高める、つまり昇華させるのです。「恋」と「愛憐」、この二つの言葉の相違に注目したいです。「愛憐」という表現は明治17年6月6日「自由灯」に掲載された女性民権運動家の第一人者で、夢柳と漢詩の唱和をしていた岸田俊子の評論「同胞姉妹に告ぐ」第五にも見られる言葉です。俊子は「男女の間は愛憐の二字をもて尊しとす。恋と云ふも情といふも皆この愛憐の二字に外ならぬことにぞはべる。然れば男女の間は相愛(いつく)

しみ相憐みて憂きも楽きも相共になしてこそ真の恋とも情とも云」い、その愛憐の情は「人間最良の感覚より生じぬるものにて天然の美徳」と述べています。つまり、「愛憐」とは男女平等を前提にする近代的な恋愛感情であり、単なる異性に対しての欲情とは区別して使われています。この苦楽を共にする「愛憐」の情であるこそ、同胞愛に昇華することができるのです。夢柳が意識的「愛憐」という言葉を選んで、ソフィアの近代的な恋愛感情を表現する可能性は十分考えられますが、「情天の雲霧に迷ひ、色海の波瀾に溺れ」るなど単なる欲情を連想させる近世小説的叙述スタイルの襲用を見れば、夢柳が恋愛に対する理解はまだ曖昧であることが窺われます。

夢柳がここで志士佳人のパターン、つまり男女の恋というテーマを作品の中に導入する理由は様々考えられますが、「高峰(たかね)の荒鷲(あらわし)」と合わせて考えれば、その目的の一つは、「志」と「恋」の葛藤を通して、主人公のソフィアを一人の「女志士」に成長させようとしたのではないかと思われます。つまり、恋の設定は「佳人」を「女志士」に成長させるための装置として機能するのです。「志士」である以上、「志」のために生命・財産・愛情つまり個人的なものをすべて棄てる覚悟をもつことが要求されるため、恋は志士にとって、一つの試練ともいえるでしょう。

ところで東京を去り、大阪・高知を中心に活動した夢柳が明治二十一年、『東雲新聞』に『鬼啾々』の日本版と言われる『芒の一と叢』を連載しました。『鬼啾々』は女志士の物語だといえば、『芒の一と叢』は佳人が女志士に成長する過程を描く物語であると思います。その成長の過程において「恋」は相変わらず重要な試練であるが、その恋の抑制について、夢柳は今まで見てきた作品のように簡単に「さすがのだれだれ、たちまち悔悟の心を生じる」など一言で片付けるのではなく、文子の心中を細かく描こうとしています。

旅行中の文子が偶然三浦卓という青年と同じ舟で旅館に帰るようになりました。資料六のAをご覧になっていただければ、お分かりになると思いますが、その場面の描写はほぼ中国才子佳人小説のパターンをそのまま踏襲しています。

その始めての対面の後、完全に恋に落ちた文子は相手の姓名寓所を聞かなかったことを後悔し、悩んでいます。後日、父親と出かけた文子がまた滝に向って演説の稽古をしている三浦卓に出会いました。資料六のＢはその時の文子の心中を描いている部分です。文子はここでやはり相手の姓名などを聞こうとはしません。が、その理由は初会の時とは異なり、初会の場合は、「耐へ忍」ぶことが強調されており、再会の場合、文子はすでに男女の恋を見事に抑制して、三浦卓に対して、尊敬の感情をしか持たないと書かれています。千万同胞のために、恋を捨てるソフィアとは違い、まだ一人の「女志士」とは言えない文子の場合はその心情の転換には別の理由が必要です。夢柳はこの理由を「家庭の厳正なる教へ」とまとめ、つまり伝統的な「女徳」と結びつけているが、その具体的なきっかけは文子の夢です。

文子の夢の内容と言えばごく単純なものです。文子は荒れ果てた平野に踏み込んでいて、そこに一匹の怖い狼が現われました。逃げようとすると、忽ち狼が優しい三浦卓に変身しました。しかし、文子が「嬉れしと思ふ間もなく其の愛すべき意中の人が再び復た怖るべき豺狼」となったという粗筋です。夢から目が覚めた文子が「悔悟の念を生じ」るといいます。夢の内容が簡単であるにも関わらず、連載一回分以上の分量があります。この夢についての描写は夢柳の怪談趣味の証拠として捉えられているが、もう少し考える必要があると思います。

夢柳の詩の仲間、同志、そして同じ政治小説家である坂崎紫瀾の『汗血千里の駒』の十回、十一回にも類似する夢が描かれています。夢の力を借りて悟るという設定自体は以前の稗史小説、特に仏教説話などにしばしば見られるため、決して新しい手法とは言えないが、しかしここでは漠然とした無常観などを表現するのではなく、主人公の心理葛藤を具象化する道具として、直接な心理描写がまだ発達していない時期において、かなり有効な手法だと思います。

この夢の力によって文子が自分の「恋心」を抑制できたということはつまり彼女が「佳人」から「女志士」への転身を実現するための重要な条件を備えた

ことを意味しています。

自ら恋を抑制することだけでなく、文子が「女志士」に転身する条件として小説の中で外にも幾つかすでに用意されていました。

まずは志士の血脈を持つことである。文子の養父及び亡くなった実の父親は幕末志士であり、その上、養父は鎌倉末期の「勤王の人」の子孫でもあるといいます。

いうまでもなく、当時の人々にとって血筋は人の資質を判断する場合の重要な基準であったに違いないです。夢柳がその歴史上の志士の延長線に文子を位置づけることは彼女の変身の用意と見ていいでしょう。

次の重要な条件は読書です。文子は虚無党のことを書いた本（『鬼啾啾』）を読むことによって、近代思想の目覚めが実現されたと描かれています。『雪中梅』下編第四回にもお春が「西洋の小説」を読んで感心する場面が書かれているように、読書が文子のような教養をもつ女性にとってどのような意義を持ち得たかについて、当時の小説には多く書かれています。小説を読んで、更に自身の口で自分の感想を述べる場面が多く描かれているが、『鬼啾啾』を読んだ文子も独り言で自分の感想を述べています。具体的な内容は資料七のA、B、Cをご参照になってください。

「貴嬢子」としての文子がいきなりソフィアの暗殺行動に触れて、まず「不孝」「不義」と思うのは極めて自然な反応といっていいでしょう。しかし、その気持ちはまた自然と変っていきます。ソフィアの具体的な行動に賛成できなくても、文子がソフィアの精神力と行動力に感動を覚え、「自づから深く信ずるもの」のために自分の命を犠牲にしたというソフィアの形象に感情的に共鳴を起すようになりました。それに続いて、夢柳は文子の口を通して、彼の「女権論」を述べています。彼が主張することはまずは女性の独立で、そして「国のため世のため」に献身することです。それは当時民権家の一般的な主張でもあり、岸田俊子が明治17年７月17日の『土陽新聞』に載せた「海南女子諸君に告ぐ」という論説にも同じ呼びかけをしています。

血筋は先決条件、読書は思想の目覚めのきっかけ、そして「恋」の抑制はその試練、それから、更に行動に移るきっかけを、夢柳は小説の中で用意していました。それは三浦卓の拘束によって湧いてきた「哀憐」の情のことです。

三浦の拘束を見て、「惻隠の情」、「憐れ」などと感じている文子が東京に戻ってから「恋ならなくに深く敬愛せしところの其の少年」のことを考えて、「明け暮胸を苦しめつゝ、今は兄弟骨肉の不幸に罹りし時に均しき思ひある」といいます。その法廷での弁護の義挙と直接つながっている同情心はソフィアの「愛憐」の情の延長線に位置することとみていいでしょう。ここで注意したいのは文子の行動の出発点が「恋」ではないことが強調されていることです。

夢柳の作品の中で、その同情心は志士の重要な資質として扱われてきました。弱いものに同情を寄せ、助けようとするのは「義」であり、その助けようとする対象が個人ではなく、「自由権利」のない人民になる場合、「義挙」が「自由民権運動」へと変身します。

ソフィアの苛酷な家庭情況、思想の勉強、同志達との交流など、このような条件は日本の貴嬢子文子の場合にはすべて欠けています。その代わり、血筋、読書、同情心などが重要な条件になっています。恐らくこれは夢柳が提示している日本における「佳人」から「女志士」へと成長する一つの可能性と見ていいでしょう。

ここでもう一つ注意したいのは、主人公の「潔白」がいつも強調されることです。この処女信仰に近いと思われる表現は、実際当時の民権家たちの婚姻観を反映していると思います。坂崎紫瀾が明治18年５月に『自由灯』に発表した「自由婚姻の説」という評論の中で、結婚について三つの条件を提示しています。その中で、「厳重にまもるべき」ことは第三条婚礼執行前には「枕席を共に」しないことです。夢柳が小説の中で、更にこれを「志士」になる条件の一つと位置づけています。

以上、「佳人」から「女志士」に転身する条件などの分析を中心に、夢柳における女権論、自由民権思想の理解と表現を考察してみました。未熟の部分が

多くて、考察の対象もほとんど夢柳の小説に限られています。皆さんのご指導、ご批評をお伺いしたいと思います。

＊討議要旨

谷川惠一氏は、「女志士」という語の概念・典拠について尋ね、発表者は、当時の新聞・雑誌に「女壮士」という語はよく見られるが、「女志士」という語はあまり見られないこと、発表では「女性・志士」という意味で使用した、と回答した。さらに谷川氏は、作者の呼称をそのまま使えばいいというわけではないが、志士仁人・女性の革命家・ニヒリスト・テロリストではなく「女志士」と捉えることで何が明らかになると目論んでいるのか、と尋ね、発表者は「志士」であると同時に「女性」である、という側面を強調したくて使用した旨を答えた。

関礼子氏は、①男性の宮崎夢柳がこのような女性たちを描いていたのと同時代に、岸田俊子が民権女性から女権家になったという流れがあるが、「女権家」と「女志士」の違いについて、②挿絵入りの新聞小説という発表媒体と内容について関連があるのかどうか、③新聞読者の求めるものを人物造形にどう反映させているのか、を尋ね、発表者は①女性テロリストなどで「女権家」とは距離があること、②夢柳の小説は自由民権運動の自由党系新聞に発表されることが多く、③当時の稗史小説は常套的に男女の恋を扱うが、夢柳の場合はそれだけではなく女性の志士に成長させるための装置として恋愛を扱っている旨、回答した。